# 魔法の代償

## 未来男編

本堂五百枝

イラスト momobuta

※本作品の全部または一部を無断で複製・転載・配信・送信など、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざんや有償・無償にかかわらず
本作品を第三者へ譲渡する行為も禁止します。

情報屋研ちゃん

# 登場人物紹介

科学が蔓延する世界に落とされた魔法という要因は、魔女と男という大きな差別を生み出した。

石見梓(いしみあずさ)・１７歳(高校２年生)
　小学生時代に両親を失い、生き残る為に女性化研究の実験体となった。実験体となった事で軍から多額の援助金を受け取っている。女性化の成功により魔法を扱える様になり、また外見も女性となったが、幼い時期はまだ男性が残っており、白い目で見られる事が多かった。他人が自分と同じ目に遭う事を嫌い、誰とでも仲良くしようとしている。魔法使い不足の対策の為に軍と県警運転免許課の両方に所属しているが、同時に高校生であり、生徒会と陸上部に所属している。

神原薫(かんばらかおる)・１６歳(高校２年生)
　石見梓と同じ寮室で暮らす高校生であり、また天才的なプログラマーである。学費を稼ぐ為にプログラミング関係のアルバイトを幾つも行なっている。石見梓と同様に軍と県警運転免許課に所属しており、軍ではプログラミングを担当し、県警では石見梓のパートナーを担当する事が多い。内気な所が多く、石見梓と会うまでは誰とも会話をしない日が多かった。

日下悠希(くさかゆうき)・１８歳(高校３年生)
　石見梓らと同じ高校に通う高校生であり、運転免許課への所属は高校１年生の時である。課室ではゲームをしているか、ごみ山となった自分のデスクの上で寝ている。

鹿島渉(かしまわたる)・２５歳(警視)
　運転免許課の課長。課長席には居らず、いつも課室のテレビの前のソファに座ってアニメを見ており、石見梓が何度注意しても治る事が無い。

成田葵(なりたあおい)・２６歳(陸上自衛隊三佐)
　陸上自衛隊の魔法使い部隊を管理する隊長。両親を失った後の石見梓の面倒を見ていた一人である。

# 魔法の代償

## 未来男編

## 未来男

「あー、課長、そういうのはセクハラで訴えられると思うんですけど」
そう言うと、課長はソファの上でぐったりと寛いだまま私をチラと見て、怠そうに言った。全くもって何時もの鹿島課長だ。
「お前は男だろ」
「いいえ女です。小学の時から女性化の実験体にされていたんですから。それに男であったとしても、まだ十七歳ですし。第一、神原さんは生まれた時から女性で十六歳ですよ」
「全く口煩い女が入ってきたもんだな。女は十六で結婚出来るんだろう？　なのに何故裸を見ちゃならん」
ここ、県警の地下にある運転免許課に所属しているのは私である石見梓、同僚且つ同級生でもある神原薫、一つ年上の日下悠希、そして課長の鹿島渉の四名だ。尤も、中身は全く運転免許課ではない。自動運転が当たり前の時代に態々運転免許を取得する人は居ない。なお、鹿島課長以外は全員高校生であり、警察官でありながら巡査等の階級は与えられていない。
この理由に関しては少し時代背景を話す必要がある。

八年前、あるAIが独自に仮想空間を構築した。その仮想空間は限りなく現実に近いが、人が何の道具も無しに空を飛べる世界という設定だった。それだけならば何ら問題は無いのだが、その仮想空間にアクセスした人間が次々に現実でも空を飛べるようになったから世界的な問題となった。

具体的な原因の解明はされていない。一説だが、どうやら人間がその仮想空間にアクセスする事で、脳が現実でも空を飛べるという思い込みをするらしい。実は人間は古くから空を飛ぶ事が出来たのだが、「空を飛べるはずがない」、「魔法なんて存在しない」という思い込みの所為で自らの力を封じ込めており、その思い込みを仮想空間が破壊してくれたお陰で、空を飛べるようになった、というのが今の代表的な考えだ。

この空を飛ぶ魔法の基本的な能力というか効果は、「推進力を物体に与える」というものだ。これが大きな問題だった。

例えば私がセクハラを続ける課長を殺すとする。ナイフを使った場合、指紋や返り血等の証拠が残ってしまうが、ナイフに推進力を与えて放てばどうなるだろうか。私の指紋はナイフに残らず、返り血も浴びない。

そのAIが作った仮想空間はフライトサイバーという名前が付けられ、国際的に管理される事になった。違法なアクセスを防ぐ為に百人以上の独立したプログラマーによって電子

障壁というネットワーク上の防壁が作られ、守られている。アクセス出来るのは国立高等学校もしくは国立大学に入学した者だけだ。ただ、入学出来るから魔法を使っても大丈夫と判断される訳ではなく、倫理教育を受け合格をしなければならない。国立高等学校か国立大学に入学した者は半年間の寮生活の間に倫理教育を受けるのだが、その倫理教育で合格が出来なければ永遠に学園に閉じ込められる仕組みになっている。倫理的に満たされた人間だけが魔法を使える世界にしようとどの国も必死だ。

私と神原さんはその寮生活で一緒だった。私も神原さんも親が居ないという事で、倫理教育が終わった今も同じ寮室で暮らしている。一年と少しの付き合いである。

国立高等学校の入学試験はそれなりに厳しく、また魔法は女性しか扱えない。だから魔法を扱える人間は少ないのだが、魔法を使った事件は多発するし、公式では未だ平和だが、実は未知の生命体との戦闘が水面下で勃発しており、魔法使いが兎に角、沢山必要な時代になっている。だからと言って魔法使いの基準を下げれば事態は悪化する可能性がある。そこで、高等学校に入ったばかりの私たちも現場に動員するという対策が現状は講じられている。

だから警察の運転免許課に高校生女子が三人も居り、中身は全くの別物という訳だ。何故運転免許課なのかは知らないが、日下さんから聞いた話によれば、公に未成年魔法使

いを雇うのは少し問題があるからだそうだ。
　また、私と神原さんは軍に所属する身でもある。軍も警察も魔法使いが欲しいので、その両方に所属させられている。
　だから、高校生兼、警察官兼、軍人という訳だ。
　なお、その後テレパシーサイバーとシールドサイバーの開発が成功している。開発を止めればこれ以上凶悪な犯罪は増えないかもしれないが、未知の生命体との戦争で優位に立つには、私たちは武器を開発し続けなければならないらしい。軍に所属しているが戦況に関しては詳しくない。
「訴えたければ訴えればいいさ」
　そう言って課長は堂々と課室のテレビでアニメを見続ける。流されているアニメは先程から際どいシーンが続いている。神原さんが気遣って言う。
「私は大丈夫ですから」
　続けて日下さんも言う。
「私は十八歳」
　民主主義的に厳しい立場に追い込まれた私は課長を一瞬睨んでから離れ、掃除に戻る。魔法使いに掃除をさせる程暇なのかと言われたら苦しいが、最近は軍も警察も暇で、神原

さんは得意のプログラミングで警察官だったり軍人だったりするのにアルバイトをしており、日下さんは試験勉強をする振りをしながらゲームで遊んでいる。魔法使いはどの業界でも重宝されるので、試験勉強なんかしなくても大学には入れるし、そもそも進学するなら国立大学の何処かに入らなければならない仕組みだし、就職も直ぐ決まる。神原さんに至ってはフライトサイバーの百人の電子障壁プログラマーに選ばれている位の天才的なプログラマーであり、引っ張りだこだろう。分身して世界平和の為にもっと貢献してもらいたい。

「そろそろ事件が来るぞ」

そうやって課長はよく予測をする。だがその予測は街中の占い師よりは的確であり、課長の言う通り、それから事件はやってきた。

※

課長が急ブレーキを掛けるので、後部座席に座っていた私は思わず頭をぶつけそうになった。自動運転が当たり前なのだから、是非ともその自動運転のスイッチを押してもらいたい。

手動運転で事故を起こしたら保険は適用されないので、課長の運転の趣味に付き合わされる私たちの身にもなって欲しい。
「荒っぽい運転良くないですよ」
「射撃と倫理教育は済んでいるんだよな」
倫理教育が済んでいなければ学園から外出許可は出ないし、射撃訓練が済んでいなければ武装する事が出来ない。
「無視しないで下さい。そうですよ。済んでいます」
「よし、なら日下は待機。常にテレパシーを繋いでおけ。日下を通じて命令を出す。赤外光学迷彩装備確認」
そう言われて、私と神原さんは赤外光学迷彩を起動させる。赤外光学迷彩とは光学迷彩の上位互換の様なものであり、装備中の赤外光学迷彩は可視光と赤外線の大部分を透明化できる。目で見えないし、赤外線探知にも引っ掛からないという訳だ。私たちはウェットスーツの様な装備の上に軍服を着ている。軍服は何時も使用するもので、赤外光学迷彩機能が無い。赤外光学迷彩機能はスーツと突撃銃一つ、ヘルメット、今回は所持していないが課室にある拳銃にしか用意されていない。神原さんの方を見ると、首から上と軍服が宙に浮いていた。

軍服を脱ぎ、ヘルメットを装着し、ヘルメットの赤外光学迷彩を起動させる。
「赤外光学迷彩オーケーです」
「橋を渡って侵入しろ。ああそうだ。これを持って行け」
課長はそう言ってデジタルカメラを差し出してくる。当然ながらこれには赤外光学迷彩が施されていない。
「持っていけませんよ」
「胸の間にでも挟んでおけ」
「はあ」
課長のセクハラに溜息を吐き、私は少しだけスーツを脱いでスーツの中にデジタルカメラを押し込み、後部座席のドアを開けて私たちは車から降りる。赤外光学迷彩の機能的に、赤外光学迷彩が施されていない物を持ち運ぶ場合はこうやって服の中に入れるしかない。例えば私がカメラを両手で覆い隠しても、手が透けてカメラが見えてしまう。
時刻は二十一時過ぎ。細い三日月の為、周囲はそれ程明るくはない。警察官や機動隊の姿が見え慌ただしいが、彼らに私たちは見えていない。目的地は橋を超えた先にある島だ。テレパシーで神原さんと日下さんと感覚を繋ぐ。同時に飛行魔法を展開し、前方に向かって自分に推進力を発生させる。これならば百メートルを六秒で走る事が出来る。

神原さんは私よりも飛行魔法の制御が上手いので、百メートルを二秒で走れる。当然ながら私には神原さんが見えないので、彼女が何処を走っているかは分からない。橋に入って数秒した辺りでテレパシーによって訊く。
「神原さん。何処？」
「橋の街灯を八つ超えました。向こう側の橋の入り口で待ちます」
「了解」
日下さんからテレパシーで連絡が入る。
「課長から状況説明。離島に立て籠もっているのは「未来男」と名乗る集団。犯行グループの人数は不明。私たちの目的は犯行グループの人数と人質の正確な人数の調査。犯行グループの武装の確認。交戦は控える」
「了解。敵が紫外線探知装備を持っていなければ良いけど」
この赤外光学迷彩では紫外線探知には引っ掛かる。尤も、赤外光学迷彩の一番の天敵は空気中の埃や、反射波で物体の位置を特定する類のレーダーだ。幾ら可視光と赤外線を誤魔化してもそれを誤魔化す事は出来ない。
「未来男たちの要求は女性優遇政策の撤廃と男女平等雇用の実現」
「ヒーローみたいな要求」

現状、女性は魔法を使えるというメリットがあり、そのお陰で随分と女性優遇となっている。私が女性化を選んだのも、そういうメリットがあるからかもしれない。
「自分の要求を通す為に犯罪行為をするのはヒーローじゃないから」
神原さんの言う通りだ。
たとえ要求が世界平和であったとしても法律を侵してはならない。随分と遅れて離島の橋の入り口まで来ると、私は道の端に寄った。僅かに腕が何か柔らかいものに当たる。
その場所には目で見る限りでは何もないので、恐らく神原さんだ。
「ごめん」
「ううん。大丈夫」
「神原さんは後衛を」
「了解」
お互いの姿が見えないので、神原さんが私の位置を手探りで探し、私を見つけると私の右肩に手を置いた。私たちはそのまま離島の内部に進んでいく。離島は既に廃棄された海軍基地であり、人質は何処からか連れて来た様だ。態々此処に立て籠もるのは、侵入ルートが限られるからだろう。この離島に入る為の橋は二つしかなく、橋を使わずに海上から接近する場合は間違いなく見つかってしまう。海中から接近するルートは一応考える事は

出来るが、その場合は高い防波堤を上る手段が必要となる。
つまり、犯行グループとしては二本の橋を見つめているだけで警官の侵入は防げる上に、対岸からの狙撃もそこまで心配する必要はない。橋の長さは二千メートルであり、海風も強く狙撃するは不可能に近い。
軍事基地の中に入って行くと、私たちは足音を立てない様にゆっくりと進み始める。幾ら目を誤魔化す事が出来ても、音を誤魔化す事は出来ない。個室が並んでいる通路を歩いて行くが、何処にも人の気配は感じられない。念の為と思ったのか、神原さんが手を放した。全ての個室を軽く見て回っているらしく、ドアが勝手に開いていく。更に進んでいくと、恐らく司令室の様な場所に出た。司令室の内部に男が三人いる。テレパシーで連絡を入れる。
「司令室と思われる部屋に三人居ます。武装は確か名前はサブマシンガン、その他に武装は見つけられません」
詳しいサブマシンガンの品名までは分からない。そこまでの知識を入れていないからだ。
「課長から。人質を捜索して」
「了解」
神原さんの手が肩に戻って来た後、共に後ろに下がり、別の場所の捜索に入る。

十数分程基地内部を探していると、格納庫に十数人の男たちが居るのを発見した。
更に、格納庫中央に人質が居る事が確認できた。格納庫には対空車両があり、赤外光学迷彩で姿は隠れているのだが、その対空車両の陰から覗き込む形で人数を確認していく。
拘束されている人質は全部で三十三名。拘束されていない武装している男は格納庫の中だけで十七名だ。
「人質を発見。対空車両の格納庫です。人質は三十三名。格納庫内の犯行グループは十七名」
「課長から。デジカメでそれを撮影」
「音が鳴るんじゃ？」
「改造してあるって」
「了解」
盗撮にでも使っていたのかと思いながら、デジカメを取り出そうとする。
しかしデジカメには赤外光学迷彩が無い。スーツを少し脱いでカメラを引っ張り出す場合、私も僅かだが見えることになってしまう。
「周囲を警戒します」
神原さんがテレパシーでそう伝えてきて、私は見えないにも拘らず頷いて答えた。

受話器を耳に当てながら頭を下げる会社員位の滑稽さだろう。
十秒ほどしてから私はスーツの中からデジカメを取り出し、対空車両の陰を使ってなるべくカメラを晒さない様にしながら撮影をしていく。確かに音は出なかった。
幾つか撮影していく。
「課長から。全員分の顔を収めたら捜索に戻れとの事です」
「了解。撮影を止めて他の場所を捜索します」
今回の事件は一般的な立て籠もりとは違う。人質は運び込まれたのであり、正確な人数を特定するのは悪魔の証明と同じだ。これが銀行とかだったら、当日出勤している銀行員の数は直ぐに分かる。
しかし、今回の場合は仮に県内で現在五十人が行方不明だから人質が五十人と断定する事は出来ない。警察に届けられていない家出している人間が居るかもしれないし、そもそも行方不明者全員が今回の事件に巻き込まれているとも限らない。離島内部全てを捜索しなければ正確な数は把握出来ない上に、たった二人では一斉に全部の個所を捜索出来ないので、人質や犯行グループが移動したら見逃す可能性だってある。
数分掛けて食堂に移動すると、そこにも犯人と人質が居た。犯人は七人、人質は十一人。にしても多い。見つけているだけで犯行グループは二十七名、人質は四十四名だ。

食堂の状況をテレパシーで報告すると、しばし沈黙してから日下さんが言う。
「課長から。県内にある赤外光学迷彩装備は百人分もない。現場にあるのは二十着程度。現場にいる魔法使いは私たちだけ。で、司令室は機動隊に任せて、食堂と格納庫を私たち三人で制圧出来ないかと相談された」
「手が足りない」
私たちは戦闘のプロではない。そんな人間が、人質が殺される前に何人も撃ち殺せるとは思えない。初弾で一人を仕留められたとしても、発砲により私たちの位置は明らかになるし、防弾チョッキを着ている訳ではないし、人質が殺される可能性だってある。
「飛行魔術を使って銃弾に発射とは逆方向の推進力を与えては如何って」
「無理。弾丸の威力を弾き返せる訳が無いし、それに何個同時に防げば良いのやら」
「だと思って課長には無理って言っているけど、何かまだ考えている」
日下さんはそう言って黙る。私たちはその間に他の場所の捜索をする。内部を調べ尽くしたが、食堂と格納庫、司令室以外には人は居なかった。続いて屋外を探す。
連絡が入ったのは屋外を回って丁度犯人たちを見つけた頃だった。犯人たちは私たちが入ってきた橋とは別の橋の入り口に居り、狙撃の心配がない事を知ってか堂々と対岸を見つめていた。

「課長から。機動隊員二十二名を赤外光学迷彩して私たちに付けるって。それで何とかならないかと言っている」
「私たちが指揮を執る必要はないんじゃ？」
「赤外光学迷彩を使って無線も使えない状況だと、私たちが指揮を執るのが適切だって」
無線が使えないのは、電波傍受の危険性を考えてだろう。現に私たちはテレパシーを使っている。
屋外で現状確認出来ている犯人たちは五名。つまり三十二名を同時射殺しなければならない。少なくとも人質の傍に居る二十四名の同時射殺が必須条件だ。
「屋外をもう少し見てから判断した方が良いと思う」
「屋外には二十三名居るそう。衛星の赤外線探知で確認したらしい」
「先に言えばいいのに」
「赤外線探知は完璧ではないから。でも全てを確認している余裕もないみたい。犯行グループが二十三時までに首相との面会を望んでいる。守られない場合は人質を十分ごとに一人殺害していくって」
「無茶苦茶な。今何時？」
「二十一時四十八分」

タイムリミットは七十二分だ。
「取り敢えず考える。二キロの橋だから、こっちに来てもらうのだけ先ずやってもらえる？」
飛行魔法を使えない機動隊員たちが二キロメートルの橋を渡り切るには十分以上掛かるだろう。
「課長に伝える……それで手配するそう」
「了解」
「そっちに向かう」
赤外光学迷彩で離島に入れるのは、今から合流する日下さんを含めて二十五名だけだ。
「さて」
っと人員配置を考えていると、肩を掴んでいた神原さんが肩を叩く。何かと思って後ろを見ると、サブマシンガンを持った数人の男たちが屋外に出ようと通路を歩いている所だった。屋外に居る私たちがこのまま留まるとぶつかる可能性があるので、私たちは道を開ける様に後退する。
屋外に出てきた男たちは屋外で待機していた男たちに向かって言う。
「警察はまだ突入してこないのか」
「ああ、膠着状態だ」

その会話の後、男たちは耳に手を当てる。暗くて見えないがインカムを付けているらしく、それで誰かからの通信を聞いている様だった。十数秒の沈黙の後、男の一人が言う。
「よし、人質を殺す。全員戦闘用意」
そう言った男だけが屋内に戻って行く。残りは屋外に待機する様子だ。
「如何いう事？　時間はまだ一時間以上ある筈」
「屋外は監視しますから、梓さんは屋内に戻って」
神原さんにそう言われて、私は屋内に戻って行く男の後を追う。
「日下さん、犯人グループが人質を殺そうとしている」
「聞えている。今、橋の中央に居て課長に連絡出来ない。戻っている最中」
男は格納庫まで戻り、他の男たちに言った。
「人質を一人殺す。警官が突入してきたらもう更に殺す。人質十人を橋の前に運ぶぞ」
男たちは目で合図を取り、三人の男が十人の人質を選んで、格納庫に入ってきた一人と合わせ十四人で外に出て行く。人質は特に取り乱した様子を見せていない。淡々と従っている。
「神原さん。人質十名と犯人四人が外に出る。橋の前に運ぶと言っている」
「了解。此方で探しますね」

私は格納庫の状況を見た方が良いだろうと、そう言って格納庫に留まる。
「日下さん、まだ課長とは合流出来ない？」
「車の中に居ない。探している」
命令は出したからコーヒーでも飲みに行ったのだろうか。無線が使えないので、日下さんが課長の下を離れたら、課長は祈る以外何も出来なくなる。一分程すると、神原さんがテレパシーで連絡して来る。
「人質を見つけました。橋の前に立たされています。撃ちそうになったら先制した方が良い？」
「駄目。一人じゃ制圧できない」
「了解です。犯人が人質に銃を向けました。……あ、監視塔にロケットランチャーを装備した人が居ます」
「ロケットランチャー？」
ロケットランチャーがどの程度の射程距離があるか分からないが、仮に対岸に撃ち込めるとしても、恐らく対岸に向かう途中で弾頭が察知され、撃ち落とされるだろう。日下さんがテレパシーで言う。
「恐らく射程は五百から千メートル。不味い、狙いは機動隊員」

「えっ？　赤外光学迷彩があるでしょ？」
私がそう言うと、日下さんは焦った様に言う。
「でもそれ以外考えられない。機動隊員を止めに行く」
既に橋の中に機動隊員が入っているのだろう。無線を使っていないので、呼び戻すには赤外光学迷彩で姿が見えない日下さんがボディタッチするしかない。
「ロケットランチャーを構えた。日下さん、危ないです」
「ロケットランチャーを魔法で弾ける？」
日下さんの提案に神原さんが同意を返す。
「飛行魔法で海に落としてみます。人質から離れます」
物体に推進力を与えるのが飛行魔法だが、だからと言ってどんな遠くにでもその魔法を掛けられる訳ではない。ロケットランチャーの弾頭に例えば下向きに推進力を与える事は、恐らく日下さんの位置からでは無理だ。一番近いであろう神原さんでも、そう長くは弾頭を操作出来ないだろう。
「外に出て人質を見る」
私はそう言ってなるべく足音を立てない様にしながら格納庫を走り出る。その最中だった。

爆発音の後、銃声が一発響く。私は走りながらテレパシーで神原さんと日下さんの安否を確かめる。
「応答して」
「私は大丈夫。ロケットランチャーは間に合いませんでした」
神原さんがそう応答する。
「私も大丈夫。ただ、機動隊員の――」
今度はロケットランチャーとは思えない程の大きな爆発音が聞こえた。それから数秒後に外に出た私は、大きな灰色の煙を見る事となった。橋の方から上がっている。
「日下さん？」
神原さんがそう尋ねるも、応答はない。私は海岸に近付き、橋の様子を確認する。
私たちが侵入してきた橋とは別の橋が、全て灰色の煙に包まれていた。橋の状況は煙に遮られて分からない。
「神原さん、日下さんの確認をお願い。私は人質を確認する」
「了解です」
橋の方に近付いて、私は人質たちを確認し始める。立っているのは九人で、横たわっている一人の頭から血が流れていた。

「人質が頭を撃たれて一人死亡」
「日下さんは確認出来ません」
「何が起きたか分かる？」
「多分爆弾です」
「爆弾？　橋に仕掛けられていたって事？」
「多分そうです。私たちが入ってきた橋を確認してもらえますか」
「了解。爆弾が無いか確認する」
　私はもう一つの橋の方に移動する。爆弾を設置するのであれば、橋の上ではないだろう。橋の上には特に爆弾を隠せそうな場所は無い。しかし、橋の下というか裏側に設置する事なんて出来るのだろうか。そう思いながらもう一つの橋の前に来ると、私は橋の裏側を覗き込めそうな階段を見つけ、それを降りる。階段は橋の裏側の辺りまでしかなかった。そして、その階段が何のために設置されているのかを知る。
　橋の裏側には太いケーブルの様なものが大量にあった。恐らく電力送電用のケーブルだろう。そして、そのケーブルが何時でも点検出来る様にという形で金網の通路が用意されていた。これならば何時でも爆弾を橋の下に仕掛けられるだろう。
　私はその通路を使って爆弾が無いかを確認し始めようとした。

ようとした、という事は実際には確認を始めなかった訳だ。正確には、確認する為に歩き始めようとして、歩かなかったという形である。
　爆弾は直ぐに見つかった。橋の裏にびっしりという感じだ。見えるだけで二リットルペットボトルサイズの爆弾が五十程ある。中身を見て確認した訳ではないが、爆弾以外の物がくっ付いている理由が見当たらない。
「橋の下に爆弾を確認」
「やっぱりそうでしたか。つまり、犯人たちはどっちの橋から機動隊が来るか分からなかった訳だよね」
「そういう事になるのかな」
「でも、私たちの姿は見えなかったという事だよね」
　そう言われて気付く。犯人が私たちを見ていたのなら、橋は逆の方が私たちと共に爆破されていた筈だ。二人しか居なかったから爆破しないというのであれば、離島の中に入ってきた私たちを射殺すれば良い話だ。
　何か妙な事が起きている。しかし、課長と連絡する手段がない以上、何が起きているのかは分からない。

「梓さん。一先ず合流しない？　私たちだけじゃ何もできないし、自分の身を守る事を優先した方が良いと思うんだけど」
「了解」
合流した私たちは屋外の人気のない草木の茂る場所で待機していた。日下さんから連絡があったのは、爆破が起きてから五分程してからだ。テレパシーが繋がった瞬間、嫌悪感が襲ってくる。恐らく日下さんが感じている嫌な気分が私たちに伝わったのだろう。テレパシー魔法は感情も伝えてしまう。
「大丈夫。生きている」
「良かった。何があったの？」
私が尋ねると、日下さんは静かに答えた。
「ロケットランチャーが機動隊員たちの目の前に撃ち込まれて何人かの赤外光学迷彩が故障。続けて橋が爆破されて、多分私以外はシールドを張れないから死んだと思う。今、泳いで本土に戻った所。課長と合流したら連絡を入れる」
「了解。こっちは屋外で待機中」
恐らく橋の中央辺りで日下さんは海に落ちた筈だ。千メートルを約五分で泳いだという事だろう。一秒で三メートル程泳いでいることになる。競泳の世界記録を覚えていないの

で断言は出来ないが早い筈だ。恐らく飛行魔法を使って泳いだのだろう。
数分程すると、日下さんから連絡が入った。
「課長と話をした。犯行グループからこう言われたみたい。『警官隊の侵入を確認した。これはルール違反であり、違反には罰が必要である』って。で、機動隊員は、遺体は確認できていないけど爆発の規模からして全員死亡。人質が一人殺されている事を確認」
私が一番に思ったのは、赤外光学迷彩二十二着が失われたという事だった。その後に二十三人が死んだ事が浮かんでくる。少し怖くなる。
軍人になる際に私はある制御回路を身体に埋め込んでおり、それを今、稼働させている。それは恐怖心を押さえ、論理的な思考を優先させる回路だ。平易に言えば、常時精神安定剤を飲み込んでいる様な状態であるという事だ。精神安定剤の詳しい効果は知らないけれど。また、その制御回路は神経によって伝達される情報を制御できるという仕組みもある。望めば痛覚を抑える事も出来る。
「首相は？」
「呼べる訳がない」
そうだろう。首相が出てきて殺されたらどんな笑い話になるだろうか。それよりならば、犯行グループが暴れ出して人質全員死亡のニュースの方がまだ良いかもしれない。

「時刻は？」
「二十二時十一分」
残り四十九分だ。
赤外光学迷彩が無く、首相を出せない以上、警察が取れる手段は犯行グループ全員の射殺の為の突入か、黙って見ているかだろう。二千メートルの橋がある以上、突入したとしても人質の命は無い。
「犯人の要求は無謀過ぎる。もしかして、人質を殺す事が目的なんじゃない？」
私がそう言うと、日下さんが答える。
「待って、それじゃあ未来男たちの要望はおかしい」
犯行グループの要求は女性優遇を止めろというものだ。此処で犯人たちが人質を殺す事を目的とした立て籠もり事件を起こしたとする。予定通り人質を全員殺害出来た場合、世論はどうなるだろうか。恐らく、「男性主義者は狂っている」とか「女性主義が正しい」とかいう意見が多く出て来るだろう。少なくとも「今後こんな事が起きない様に男女平等を築こう」とはならない筈だ。
つまり、犯人たちが人質を殺す事を目的とした立て籠もり事件を起こした場合、表面上の要求は全く逆の意味を持つことになる。

この続きは製品版をご購入頂き、
お楽しみください。

サークル名

情報屋研ちゃん